

裏方通信番外編、再び所蔵品管理サポート部会（以下、この文章内では「サポート部会」と略す）の話題です。このサポート部会の日頃の活動は「地味」の一言に尽きるので、遠く九州のそれも国立博物館との交流というのは、驚かれるかもしれませんね。

話は2年前に遡ります。九州国立博物館（以下、九博と略す）は平成19年から20年にかけて、「市民共同型IPM活動に関する研究会」というのをなさいました。ここではIPM（*1）についての説明はスキップしますが、まあ美術館博物館が文化財を未来に向けてまもってゆくために、近年選択されることが増えてきている一つの手法のこと・・・ぐらいに今は理解して下さい。そしてこれを博物館という枠の中にいる人間だけでなく、本来の文化財、博物館の所有者である市民のみなさんと共に実践してゆくにはどうすれば良いのか、というのが、この時の九博さんの研究テーマの概要です。

さて、実は愛知県美術館（以下、県美と略す）も、このIPMについては早くから取り組んでいる館であり、かつその活動は前回お話したとおり、外部協力者であるサポート部会（基本的に一般市民の方）に多大なバックアップをお願いしている館でもあります。それでその研究会のシンポジウムで愛知も事例発表のお誘いを受け、私（N.N.）が発表させて頂いたのですが、そこで私は九博をめぐるその博物館活動を支援する諸団体のみなさん（博物館のボランティアやNPO法人、「九博を愛する会」の方々など、以下、「九博のみなさん」と略す）の素晴らしい発表に触れ、大変に感動致しました。そしてこちらの県美サポート部会のみなさんと交流ができたらいいですね・・・というのを、その事例発表の結びにした・・・というのが、事の発端です。

話が飛んでしまうのですが、今年、この東海地区で初めて文化財保存修復学会という学会の大会が岐阜で行われました。そこに出席される上記「九博のみなさん」が、大会より一日早く東海地区入りして下さり、なんと本当に県美のサポート部会を訪問して下さったのです。



引き合わせた当の「言いだしっぺ」は、当日、上記、地元で行われる学会の大会の準備の為に、その会に参加できませんでした。「いつも内助の功に徹している、うちのパパやお母さん達が、そんなに大勢の方々に囲まれて大丈夫かしらん」なぞと・・・後ろ髪を引かれる思いで学会の方に向かったのですが、なんのなんの・・・、そんな心配はまったく無用でした。

その後、学会で合流した「九博のみなさん」から口々に「愛知のみなさんに元気をもらった」「話に聞く以上に、美術館のために細かい作業をなさっていることに驚いた」等、私はたくさんの感想を学会の会場で伺う事になったのです。後に写真を拝見させて頂きましたが、大変に和気藹々の会であったことを感じる事が出来ます。



「九博のみなさん」と「愛知県美のサポート部会」では、実際に行っている活動の内容にはかなりの違いがあるのですが、「自分達が支援している博物館（美術館）の活動の一部を協働している」という思いは、みなさん同じだったに違いありません。同じ目的の元、「何をどうしているのか、そしてその活動が館の活動にどのようにつながっているのか」という点で、すぐに会話が弾まれたのだらうと思います。



「黒子に徹することの美学」、これは九博でのシンポジウムで九博のボランティアさんから伺ったのですが、私はこの言葉を聞いたとたん、まるでぐっと棒でも呑んだように上半身が起き上がってしまいました。この美学の意味や尊さを一番理解できるのは、もちろんこの美学を追求している方々同士に違いありません。今後もこのような交流がさまざまなところで行われればいいなあと思います。

(N. N.)

* 1) Integrated Pest Management (総合的有害生物管理) の略。害虫・カビといった生物被害を回避するための方法。これについてはまた後日、もう少し詳しく話題として取り上げます。